

三 小松島の自然災害

「災害は忘れた頃にやってくる」というが、ここ小松島は、台風災害は忘れないうちに幾度となく襲来する台風銀座に位置するので、台風に対する備えは市民もよく心得ている。しかも戦後五〇年の間、毎年のように続いた災害復旧の土木工事により、防潮堤、河川の改修、排水施設の整備等が完全とは言いがたいもの、一応なされているので、台風による被害は低地帯の浸水と山崩れを除いて、あまり見聞きしなくなった。急傾斜の

山麓に住む人達には、大雨と地震に対する警戒が必要なのである。

平成七年神戸を中心に襲った大地震は忘れた頃に起こる災害の恐ろしさを如実に示したものであった。予期しないことはいくもの、千年に一度は動くという活断層が地下にあるのだから、まさに「災害は忘れた頃にやってくる」の格言のとうりになったということ、地震こそは忘れた頃にやって来る災害の典型であろう。

1 地震・津波

徳島市民双書『徳島の地震津波』（徳島県立図書館主幹・猪井達雄、徳島大学工学部教授・沢田健吉、徳島大学工業短期大学部助教授・村上仁士共著）によると、記録に残る我が国最古の地震は六八四年の白鳳地震で、それに伴う津波を物語るものとして、日本書紀の記述をあげている。これにより、津波が土佐（高知）を襲い、田畑が約一、二〇〇ヘクタール（一二平方キロメートル）海中に没し、貢ぎ物を運んでいた船が津波で多数沈没したことなどが知られるとしている。

また、これには地震による地鳴りの描写もなされているし、震源が室戸岬沖にあったとされることから、当然徳島でもその影響をうけたことが想像されるが、それを示す資料は見付かっていない。

ついで仁和三年（八八七）紀伊半島沖を震源とするマグニチュード八・六の巨大地震が発生、大津波が四国、紀伊半島および大阪湾一帯を襲い溺死者多く、なかでも大阪が最も大きな被害を受けたとの記録が残っている。しかし、徳島については前と同様で記録がない。

徳島について地震津波の記録・資料があるのは「康安地震」正平一六年、即ち、康安元年（一三六一）八月三日（南北朝時代で世はあげて戦乱の最中、旧暦では六月二四日）の午前四時頃、紀伊半島沖を震源にマグニチュード八・四の大地震が起こり、大阪の四天王寺、京都の東寺、奈良の薬師寺、和歌山の熊野神社が

破壊されるなど甚大な被害をうけた、この地震は当月一八日頃から続いていて余震が多く、和歌山の湯の峰温泉の湯が止まったといわれている。この地震により大津波が発生、大阪、高知、徳島沿岸で大きな被害が出たことが記録に残っている。なかでも海部郡の由岐では一、七〇〇戸の家屋が流失し、六〇余名が流死する被害が出たという。また大阪の沿岸では津波が襲った一時間ほど前に数百メートルも潮が引いたといわれている。これらのことは太平記巻三十六（日本古典文学大系36岩波書店）に「大地震並夏雪事」という題がつけられ記述されていることから知ることができる。その一部分を『徳島の地震津波』よりそのまま次に引用させていただく。

「康安元年（正平一六年）六月一八日の巳刻（午前一〇時）より同一〇月に至るまで、大地おびただしく動いて、日々夜々に止時なし。山は崩て谷を埋み、海は傾て陸地に成しかば神社、仏閣倒れ破れ、牛馬人民の死傷する事、幾千万と云数を知ず。総て山川・江河・林野・村落此災に遭すと云所なし。中にも阿波の雪の湊と云浦には、俄に大山の如くなる潮漲来て、在家二千七百余宇、悉引塩に連て海底に沈しかば、家々に有所の僧俗、男女、牛馬、鶏犬、一も残らず底の藻屑と成にけり。是をこそ希代の不思議と見る処に、同六月二二日、俄に天搔雲雪降て、氷寒の甚しき事冬至の前後の如し。酒を飲て身を暖め火を焼、爐を囲む人は、自寒を防ぐ便りもあり、山路の樵夫、野径の旅人、牧馬、林鹿悉氷に閉られ雪に臥て、凍へ死する者数を知ず。七月二四日には、撰津国難波浦の澳数百町、半時許乾あがりて、無量の魚ども沙の上に吻ける程に、傍の浦の海人共、網を巻釣を捨て、我劣じと捨ける処に、又俄に大山の如くなる潮満来て、漫々たる海に成にければ、数百人の海人共、独も生きて帰るは無りけり。又阿波鳴戸俄に潮去て陸となる。（中略）又八月二四日の大地震に、雨荒く降り風烈く吹て、（中略）洛中辺土には、斜め塔の九輪もなく、熊野参詣の道には、地の裂ぬ所も無りけり。旧記の載る所、開闢以来斯る不思議なければ、此上に又如何様なる世の乱や出来らんずらんと懼恐ぬ人は更になし。」と記されている。

ここのでてくる「雪の湊」とは由岐の港をさしている。また、津波によって鳴門の海水が干あがり海底がみえた様子も記されている。

慶長元年（一五九六）九月四日の別府湾沖の地震、その翌日京都で起きた「地震加藤」の芝居で知られる地震があった。そして慶長九年（一六〇四年）二月三日午後八時頃、房総半島南東沖と室戸岬沖の二つを震源にしたマグニチュード七・九の地震が同時に起き、これによる大津波で犬吠岬から九州に至る太平洋沿岸の広大な地域に大きな被害を与えた。徳島県でも宍喰で一、五〇〇余名の犠牲者を出すほどの大被害を被っている「慶長の津波」。元禄一六年（一七〇三）二月三十一日には、伊豆大島近海を震源とする、マグニチュード八・二の大地震が起きている。世に言う元禄地震で、このとき小田原城下は全滅、地震と津波による被害総数は家屋の破壊二〇、一六二戸、死者五、一三三三名という甚大なものであった。

そして四年後、宝永四年（一七〇七）一〇月二八日午後〇時三〇分、マグニチュード八・四という我が国最大級の地震が紀伊半島に発生した、地震による被害は東海道、伊勢湾、紀伊半島方面で最大、遠方の広島、熊本、鳥取、石川県等にまでおよび家屋の倒壊や多数の死者がでたという。これによる津波は、伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸および大阪湾・播磨灘・伊予灘や山口県の瀬戸内沿岸を襲い、八丈島にも被害を及ぼすという激しさであった。

なかでも高知の被害が最大で、家屋の流失一一、一七〇戸、全壊四、八六六戸、破損一、七四二戸、溺死一、八四四名、行方不明九二六名にのぼり、そのほかに七六八隻の船が流されたりこわされたりしたという。高知について和歌山の津波災害も甚大であった。この地震と津波による被害総数は家屋の破壊二九、〇〇〇戸、死者四、九〇〇名にものぼっている。この全体数をみると高知の被害がいかに大きいかがうかがえる。

このとき地震による地盤変動が起こり、高知市の西隣りの土地が約二〇平方キロメートルの範囲で最大二メートルも水没した。また室戸岬でも一・五メートル、串本一・二メートル、御前崎付近で一・二メートルの隆起が生じた。他にこの地震で松山の道後温泉の湯が一四五日間もとまったといわれている。

この年は、一月二三日に富士山が噴火するなど異常なことが連続した年でもある。この津波の波源域は南海トラフから相模トラフに達する全長六〇〇キロメートルであったと推定され、世界の巨大津波に劣らない規模であったといえるだろう。

この宝永の地震では高知の「谷陵記」に「徳島 土屋敷二三〇軒民屋四〇〇軒地震につぶる、」とあると、前述の「徳島地震津波」に記してあるが、小松島については記録がない。小松島に地震津波による災害の記録がみられるのは宝永の地震津波から、一四七年後の安政元年（一八五四）一月二三日午前九時頃に起こった、遠州灘を震源とするマグニチュード八・四の大地震（安政大地震）からである。この年の前年には、歴史に名高いペリーの黒船来航があり、世はこれをきっかけにして徳川幕府三〇〇年の太平の夢破れ、人心穏やかならざる幕末騒乱の時代に突入していた。

この地震による災害は、沼津から天龍川河口までの沿岸が最もひどく、甲府、松本、松代や福井県あたりまで被害を及ぼした。これを安政東海地震という。この地震によって起きた大津波は、房総から高知沿岸にまで襲いかかり、とくに伊豆の下田で、総戸数八七五戸のうち八四〇戸が全壊流失、総人口三、八五一名中一二二名死亡という大きな被害を出している。このときの津波の高さは五メートルに達し、下田に碇泊していたプチャーチン率いるロシアの軍艦ディアナ号がこの津波で大破、数日後に沈没した。その他、伊勢志摩、熊野灘沿岸でも家屋の破壊や多数の死者を出したとある。

この地震から三二時間後の、一月二四日午後四時頃、全く同じ規模をもつ地震が今度は紀伊半島沖で起こった。これを前日の地震と区別して安政南海地震という。前日の地震や津波に加え、この日の津波は房総より九州東岸に至る広範囲に多くの被害をもたらした。

震源に近い紀伊半島では壊滅的な打撃を受けた村が沢山あった。津波の高さは串本で一五メートル、熊野灘側の古座では九メートルもあったという。

大津波で毎回のよう被害を受ける和歌山県の広村では、このときも総戸数三三三九戸のうち一二五戸が流失、一〇戸全壊、四六戸が半壊、一五八戸が浸水で破損し村の人口一、三三三名のうち三六名が死亡したと伝えられるが、この津波について広村の浜口儀兵衛は次のように書き残している。〈津波―その発生から対策まで―三好寿〉。「なお進まんとするに流材道をふさぎ、歩行自由ならず。よって従者に退去を命じ路傍の稲村に火を放たしむるもの十余、もって漂流者にその身をよせ、安全を得るの地を表示す。この計むなしからず。これに頼りて万死に一生を得たもの少なからず。かくして一本松をひき取りしころ、轟然として激浪きたり、前に火を点ぜし稲村、浪に漂い流るるの状、観るものをしてうた天災の恐るべきを感じしむ。」これは村人を救うため稲村へ脱穀した稲わらを積み重ねたもの（に火をつけて道を明るく照らし、村人に逃げ道を示したときのことを記したものであるが、後にラフカディオ・ハーン〈小泉八雲〉が「生ける神」という標題で海外で紹介、そして「稲村の火」として教科書にも採録された。浜口儀兵衛はこの津波の後、私財を投じて高さ四メートル、延長六五二メートルの防波堤を築いた。その堤防は昭和二十二年（一九四六）の南海地震の津波から町を護ったと伝えられている。

この津波は大阪湾内をも襲っている。大阪では木津川や安治川を津波が逆のぼり、碇泊中の船を多数破損させ、あるいは橋を壊したりした。大阪ではこのときの津波で一説には七、〇〇〇名の死者が出たともいわれている。

この津波は高知でも猛威をふるい、徳島県でも南部ほど被害が大きかったので、それだけにこの津波に関する資料も県南に多く残っている。さて、小松島近辺では、中島港が大破し、富岡町辰巳新田では六〇センチメートルの地割れができたところもあり、黒津地の南新田が一面海になったといわれているが、このとき今津の江野島大手海岸の松原が防潮堤の効果を発揮したと伝えられている。

この地震で徳島城下では大火に見舞われている。内町から出火し稲田九郎兵衛、加島出雲の屋敷が全焼し、通り町一丁目から三丁目まで残らず全焼した。さらに、中通町、紀国町、八百屋町、寺島町、内町、助任、新シ町一、二、三丁目中ほどまで焼失し、総計約一、〇〇〇戸が焼失するというすさまじさであった。

さて、小松島では小松島市史に地震の記録として、この安政南海地震が初めて登場する。現在の小松島中心市街地の母体が形成されるのは藩政時代に入ってからであるが、元禄時代には仲町、北町、新町、西町が形成され、土佐街道からの入り口としての西の口が付属していたというのであるから、宝永四年の地震記録など残っていないようなものだが現在のところ発見されていないのは、多分大した被害が無かったからであろうと思われる。

そして、この安政地震の時代には藍の豪商、地主らの大邸宅を中心に商家、紺屋などと、そこに働く職人、使用人らの住居があつて繁栄していた。そんな人々の生活を根底から覆すほどの被害をもたらしたのが、世にいうこの安政大地震であつた。古文書のとおり旧暦でいうと安政元年（一八五四）一月四日の朝方、夜に二度ゆれ、五日夕方に大ゆれにゆれたのである。人々は取るものも取りあえず、家をとびだし広い場所へ逃げ出した。そこへ間もなく午後五時半頃小川屋から出火し、近隣の者が総出で消火活動、大方鎮火しかけたところに誰言うもなく津波の噂が出て消火に当たっていた者たちも思い思いに我がちに逃げたので、残り火が潰家の下へ三角状の屋根裏の空間が煙突の役目を果たすを這い西北の風にあふられて燃え上がり、光

善寺の御堂に燃え移り、そこから北町、中町、新町、浜須賀方面に飛び火して同時に燃え上がった。その間も地震は絶えずゆれていたもので、人々は恐怖のあまり消火にあたるものは全く無く小松島浦の七割方を焼き尽くし、朝方の六時頃によく鎮火した。

人々は芝山、中の郷の天神原、成願寺校馬場など土地の高いところに逃れたので、けが人や死者はなかったものの着のみ着のまま焼けたのである。そのときに焼失した戸数は三四八軒土蔵六三、納屋九三、寺院四宇、鐘楼一、釣鐘堂一、荒神社一が焼けた。津波は小松島浦にも襲来したが川口で八方に広がり、沿岸の堤が六〇メートルも切れて今開、南開方面に塩水が流れ込んだものの、すぐ引いたので大きな被害を被らずにすんだ。

一方、小松島浦の町並以外では、田野、旗山、金磯新田、和田津新田が大きな被害にあい田野旗山まで津波が打ち寄せた。小松島沖合にある「お亀磯」はこの津波で全く水没してしまい、干潮時にわずかに頭部を見せる程度になった。赤石町の豊浦神社にこの津波の碑があり、次のような銘文が刻まれている。

「安政といふはしめのとし霜月五日大地おをひに震ひ高浪にひかれて死る人数をしらさりしにこの豊浦の人々近き村々の人々はここ白楽天王のゆにはしり集まりて難をのかれたりしは偏に神の守り給う恵の深きなれば後ののちまでもわすれざるためしるすものなりかし

世話人 伊槻熊江門 伊槻直右門 橋本 堅蔵

泉 竜蔵 豊崎 甚弥 伊丹 市蔵

刈屋 □□ 高橋 藤吉郎 「

2 南海地震津波

六四

昭和十九年（一九四四）一月七日マグニチュード八・〇の大地震が熊野灘で起こり、静岡、愛知、三重、奈良、滋賀の各県に大きな被害を与えた、世にいう東南海地震である。この地震に伴う津波は伊豆半島から紀伊半島沿岸を襲い、被害は熊野灘沿岸でとくに大きかった。徳島でも日和佐で高さ二メートルを記録したが幸い被害はなかった。またこの時は太平洋戦争末期であり、報道管制のため地震津波の被害は僅小と報道され、国民の多くは知らずにいたのであった。

当時の記録について、「昭和二万日の全記録」講談社刊6（太平洋戦争）より被害状況について以下に抜粋する。「愛知・三重・静岡の三県を中心に死傷者は四〇五七人、家屋の全半壊は七万三〇八〇戸にもほつた。なかでも日本の航空機・兵器・電気機器製造工業の中心であった愛知県下の軍需工場は、三分の一が壊滅、交通、通信も麻痺して生産は中断してしまった。―中略―名古屋市の三菱航空道徳工場では、女子挺身隊など六四人が死亡、半田市の中島飛行機山方工場でも九六人の動員学徒が死亡した。―中略―軍部は戦局を左右しかねない「重要工場」地帯の被害に、嚴重な報道管制をしいた。翌八日発行の『朝日新聞』は、二面の左下隅に「東海地方を襲った七日の地震は以外な強震だったが一部に倒半壊の建物と死傷者を出したのみで大した被害もなく」と、小さく報じた。そのためか、被災者たちは「新聞にも小さく被害僅少なりと報道されたのみで、どこからも救援はなく、被災者は空き地にむしろを敷いて壊れた家の下から布団など持ち出して夜空を仰いで寝ました」（地震体験記録集）という状態だったという。

この地震から二年後、昭和二十一年（一九四六）一月二二日午前四時一九分、紀伊半島沖を震源とするマグニチュード八・一の南海地震が起こり、被害は中部地方から九州にまで及んだ。地震と津波により全国で死者一、三六二名、負傷者三、八四二名、行方不明者一三名、家屋の全壊一一、五〇六戸、半壊二三、四

八七戸流失家屋一、四五一戸、火災による焼失は二、五九八戸にも及び、とりわけ高知・徳島・和歌山の各県の被害は甚大であった。この地震、徳島では震度五の強震で激しい水平動、戸外に出ても立って居られないほどの強震であったと、市史に記されている。この南海地震津波については小松島市史に記載されているので割愛するが、市史がとりあげなかったことなど簡単に記しておきたい。この地震によって各地で地盤変動が起きたが、特に地盤沈下が激しく稲作が出来なくなった金磯新田では、その後三〇～三五センチメートル盛土（答土）を行なった。

この地震・津波の規模は宝永や安政のそれと比べると規模が小さいにもかかわらずかなりの被害が出ている。その原因としては、津波の来襲が夜明前であり、しかも満潮時と重なったことによると考えられている。小松島市民にとって恐るべき自然災害は地震・津波であるが、今迄の記述で明らかかなように、それは全てといってよいほど南海トラフを震源としたものである。しかもこれは規則正しく一〇〇～一五〇年の間に起こっており、間隔が一〇〇年内外だとマグニチュード八程度、期間が一〇〇年より長くなるとマグニチュード八以上の大地震、大津波となっている。この特徴は今後の地震予知に生かされるであろう。平成七年（一九九五）一月一七日未明に起こった阪神・淡路大地震は、日本列島が地震活動期に入ったことを意味するといった地震学者が居るが、その後日本各地で中小の地震が群発しているのが、なんとなく不気味である。

3 阪神・淡路大震災

平成七年（一九九五）一月一七日午前五時四六分、淡路島北端の野島断層を含む有馬―高槻―六甲断層帯の活断層群が動いた。大地がドーンと突き上げられ、たたきつけられた。マグニチュード七・二の内陸直下型地震が、神戸市を中心として関西地方を襲ったのだ。この巨大地震は高度の工業文明を誇る大都市を僅か

二〇秒で壊滅せしめた。

「揺れなんでもんじゃないなかつた。爆発みたいにドーンと突き上げられて、それから下へたたきつけられ、激しく揺さぶられた」

最初の衝撃を、多くの被災者は、こう表現したと報道機関は伝えた。テレビは地震の惨状、火災の状況などを地震発生以来刻々と伝え続けた。テレビ映像で見る高速道路・ビルの倒壊、新幹線の高架の落下等々を見せつけられて、世界のトップレベルにあるといわれていた土木建築の耐震技術も瞬時に色あせてしまった。都市機能を支えるライフ・ライン、交通アクセスなどのインフラストラクチャーが壊滅状態になり、ガス、水道、電気、電話などが使えないと消火活動も、医療活動もままならず、火災、生命の危険から逃れるすべがない。そのうえ自動車が交通を麻痺させるなど、文明の利器が逆に被害を拡大させた。

被害状況は、死者六、四三〇名（九七年発表） 負傷者三四、六二六名、家屋の全半壊一五九、五四四戸、そのうち神戸市で倒壊、大破したビルは九四〇棟を超えると日本建築学会の調査は伝える。また死者の九割は圧死によるもので、その約半数は老人だという。

徳島県内でも鳴門市で家屋などが被害をうけた。小松島でも道路や塀、家の壁などに小さな亀裂ができたのを見たという人は多い。

この震災で人々が異口同音に感嘆して賞賛したことは、被災者のモラルの高さである。外国のような略奪・暴行がなく冷静だった。一月二〇日の報道では、避難所で夜を明かした被災者二八三、〇〇〇人、避難所は九九八カ所と報じられたが、それだけの数でありながら大した事件もなかったことは人々のモラルの高さを証明して余りあるといえよう。なお頼もしいことに全国から阪神地区にボランティアが集まった。医師、看護婦、建築家、弁護士といった各分野の専門家、学生、一般社会人等が被災者の治療、介護、世話、激励、

法律相談等々救援活動、援助活動を展開した。外国からも救援隊が駆けつけるなど、全国的、世界的な広がりをもせたボランティア活動は被災者を大いに励まし勇気づけ、義援金も多く寄せられて、復興の意欲をかきたてた。

しかし多くの企業が被災したことは失業者を生むし、港湾が壊滅状態になったことで、貿易港としての機能を失ったため経済活動は著しく低下した。神戸を中心とした交通アクセスの機能低下は小松島港ヘトラックが押し寄せて長い行列を作ることになった。第二国土軸の必要性が確認される格好になると同時に、神戸港を補完する港として、コンテナ埠頭など高度な機能と設備を備えた赤石港建設の必要性がクローズアップされることになった。この地震は、実に多くの学ぶべきことを残した。

なかでも新しく変化した時代の特徴として、電話回線がバンク状態で駄目になっていたときに、パソコン通信が威力を発揮したことである。マルチメディアの時代になって、あらゆる情報が瞬時に世界を駆け巡る現代では、自治体や政府が発表する情報よりも民間のパソコン通信やテレビ報道が、惨状を生々しく素早く伝えるので、自治体や政府の対応の遅れが目立つようになった。

現代社会ではあらゆる面にコンピューターがコミットメントしているので、いま問題視されている西暦二〇〇〇年問題などのように、金融、経済、個人の社会生活にどんな悪影響を与えるか、予測できないといわれるような、全く新しい文明災害ともいべきものにも我々は見舞われようとしている。

災害は人々を不幸に陥れるが、人々は常にそれを克服し、多くの教訓を歴史に残してきた。これからもそうしてあらゆる災害を克服して行くであろう未来の姿を信じたい。

終りに、風水害、洪水等については市史を参照していただくことにして、割愛させていただいたことを付記しておく。

八 安政大地震の古記録（九代多田助右衛門）

多田家九代助右衛門は安政の大地震による小松島の被害を生々しく記録している。次文はその貴重な小松島関係の読み下し文である。

（読み下し文）

徳府より二里ばかり南、小松島とて富商多き也国交易を兼ねたり五日夕地震後海潮北町の軒下まで突来りしがすは津浪よと承はるなどに衆皆日の峯へ登り避しが倒家より火出けれど火消ものとてなく焼ゆくままに浦中九歩は焼たり西北僅かに残れり祇園社北の地藏寺等残れり孰れも身のまま走通家財悉く焼たれば難渋いはんかたなし御上より早々小屋打粥を賑いし撫恤なし玉へり其時野上屋某同じく炎焼せしがこと島中火災に罹りし者共へ銀札五十目宛施せし其後播磨屋某も壹人に米五斗俵一つ宛島中へ施せしと也

愚按に此島古来海溢の災ありしを聞ず又火災の數家に及びし事希也さはいへど又如何なる海溢あらんこと測がたき曾て無りし火災の起りし如くなり是まで海溢の災なきは地勢によりて然る事なるべし海部より捨里餘り内へ

入り山岸のかこひたる險阻の地にありて廣平の浦なり縦ひ海部の如きさへ大里なんと海濱潮の揚りし痕なし南海に係りたる地にして尚かくの如し是も地勢に因て然る成べし海濱の恐れなきにはあらずと大に周章し失火を見捨て隔たる山へ逃登るには及ぶまじと思はる此顛倒騷動あらざらんにはかかる火災には到らざるべし
赤石村山添の所壹丁計潮打入床上貳三尺是は五日暮方より戌時まで五度浪来りしよし三ツ井利四ツ井利とも大いに崩れたり

（原文）

安政五年十一月廿一日
多田助右衛門
徳府より二里ばかり南、小松島とて富商多き也国交易を兼ねたり五日夕地震後海潮北町の軒下まで突来りしがすは津浪よと承はるなどに衆皆日の峯へ登り避しが倒家より火出けれど火消ものとてなく焼ゆくままに浦中九歩は焼たり西北僅かに残れり祇園社北の地藏寺等残れり孰れも身のまま走通家財悉く焼たれば難渋いはんかたなし御上より早々小屋打粥を賑いし撫恤なし玉へり其時野上屋某同じく炎焼せしがこと島中火災に罹りし者共へ銀札五十目宛施せし其後播磨屋某も壹人に米五斗俵一つ宛島中へ施せしと也

赤石村山添の所壹丁計潮打入床上貳三尺是は五日暮方より戌時まで五度浪来りしよし三ツ井利四ツ井利とも大いに崩れたり